

資料1 三瓶長寿「新型コロナウイルス状況下で礼拝を守る指針」(2020.3.15)

在主

わたしはかねて、人類が最後に迎える危機はウイルスであろうと考えてきました。今回、新型コロナウイルスの感染が広がり、人が参集する催しに警告、自粛が要請されるようになり、大会、中会から礼拝への警告がとどいて、教会の委員たちとも集会のもちかたについて意見を交換しました。岡山伝道所は、玄関にアルコール消毒スプレーを準備する程度ですが、感染がさらに拡大していったときの集会、礼拝をどうするのかを牧師として考えてみました。事態が変わればまた変わっていくかもしれませんが、共に考えてみてください。

新型コロナウイルス状況下で礼拝を守る指針

2020.3.15. 三瓶長寿

いま起こっている新型コロナウイルス感染というこれまで経験しなかった自然的・歴史的状況のもとで、「主日礼拝」を守ることにについていかに判断すべきか、牧師の考えをのべます。

まず、いま起こっているウイルスの感染状況、事態、防止の方法、対処について、教会は最大限、客観的で誤りのない専門家や経験者の知見を十分に聞いて、礼拝の環境を整備することが必要。その上で教会（小会）は聖書から神学的に熟考し判断する。

1. 聖書、教会史は、「主日礼拝」はいかなる自然・歴史的状況の下においても守るべきことを語っている。まず第1に「主の日」「週の初めの日」は、弟子たち、教会、人が定めた日ではない。キリストの復活の日として、また命、希望、慰め、主の平和、パン裂き（礼拝）の日として神が召集した日である（マタイ 28:1、マルコ 16:9、ヨハネ 20:19、ヨハネの黙示録 1:10、I コリント 20:7）。主の日の礼拝は人間の側の状況を越えて、神から与えられた、神の勝利をたたえ、礼拝し、神の救いにあずかる日として定められている。キリストによる神の救済の予型である出エジプト記もイスラエルの解放は「礼拝」への解放であったと告げる。神はファラオに「神に仕える」ために（アバド）、「主に犠牲をささげる」ために、（ツァバアク）～これらは礼拝のこと、～イスラエルを解放することをモーセに告げさせる（3:18, 5:22-23, 25）。教会は礼拝へと救われた。
 2. 教会はいつの時代の困難や迫害下でも集められ、礼拝をささげ、祈った（ヨハネの黙示録 1:10、使徒言行録 12:12）。古代教会は迫害下カタコンベ（地下墓地）で、16世紀プロテスタント教会はカトリックの迫害下で、20世紀ドイツ告白教会はナチス政権下ユダヤ人を擁護して危険と苦難と死の下で礼拝を守る戦いをした。教会はいかなる自然的・歴史的状況下においても全被造物の救いを神に祈る教会として礼拝を守り、ささげてきた。
 3. 教会が礼拝（共同礼拝）をささげる場所と時間は固定されない。状況において礼拝の場所と時間は変えてよい。出エジプトの教会は旅とともに礼拝の場所を移した。
 4. 教会はいかなる状況にあっても神への礼拝と世界の救いのしるしである礼拝を閉じてはならない。困難な状況にあっても長老教会の核である小会、牧師、長老はいかなるときでも共同礼拝を守りつづける。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（マタイ 18:20）。そこに会員は自由に参加する。
1. 共同礼拝への参加は、平時においても緊急事態においても、だれにも強制されない。各自の「信仰と良心の自由」にしたがってなされる。神の教会は神の民の礼拝を何人も、何人からも奪ってはならない。それゆえ共同礼拝は閉じられない。信仰者は「信仰告白」も「礼拝」も、「いかなる業」も、自分の信仰と良心に従って行う。強制されたり疑いながらしてはならない（I コリント 10:27-29。「良心の故に食べてよい。良心のために食べない。わたしの自由（良心）は左右されない」）。いまの状況下においても礼拝への出欠は神への信仰と良心に従って各自の判

断によって決められる（信教の自由）。

いま起こっている状況、事態にたいする知見は大切な賜物で、教会は最大の配慮をもって礼拝の環境を整える。そしてこの現実の中で聖霊とみ言葉に導かれて礼拝を守る。

主よ、私たちを、世界をお守りください。アーメン。

資料2 久野真一郎「ウィルス感染に関して／三瓶長寿先生へ」（2020.3.27）

三瓶長寿 先生

主の御名を賛美いたします。

奥様のことを聞き及び、先生はどうしておられるだろうか…と心配しておりました。その先生から今回のウィルス感染拡大という事態に関する指針をお送りくださり誠に有り難うございました。大変励まされています。

先生が示された「新型コロナウイルス状況下で礼拝を守る指針」を読ませていただきました。

主日礼拝に関する先生の見解に、基本的に同意いたします。

ただ、お聞き及びかも知れませんが、実はわたし自身が2月28日（金）に教会の牧師室での対話から感染し、結局二人の長老とわたしと家内、教会幼稚園教師一名とその家族全員が感染者となりました。これによりそれぞれの家族、他の一人の長老も濃厚接触者となった次第です。

わたしは大会議長として2月27日付で各中会を通して書簡を送りましたが、その中で「教会にとって主日の礼拝は生命線」と記しました。

しかし上記のように、教会の教えるつとめ、治めるつとめを担っているわたし自身および長老たち（書記長老を含む）が感染者あるいは濃厚接触者となるという、思わぬ事態を迎えることとなりました。

そして、わたしの感染が明らかとなる（3月10日）までの限られた期間に、濃厚接触者である書記長老と（すでに外出自粛という強い指示が出されており小会も本来の形では行えない状況となっていました）何度もこの状況への対応について話し合いました。その結果として3月1日は聖餐をしない礼拝（出席は普段の三分の一ほどでした）、3月8日は外出を控えたり外出禁止となった施設入居者もあり、わたしもまた陽性の連絡は受けていませんでしたので、感染を避けるため、濃厚接触者だけで礼拝をささげ（わたしが司式と説教、濃厚接触者長老の奥さんも濃厚者ですが、奏楽を担当してくれました）、教会の方たちにはライブ配信やDVDでの礼拝、そして礼拝を覚えて祈って欲しい旨伝えました。しかしそれでも礼拝に出席した人があり（3名別室で）、また事情を理解して自宅に戻った人もあります。

この時点では、当面この形での礼拝を続ければよいのではないかと考えていました。しかしその直後、わたし自身、体調に異変を感じ（13日まで異常がなければ濃厚接触者ではなくなるはずだったのですが）、9日（月）に保健所に連絡、検査の許可が出て、翌10日に検査、その日のうちに陽性ということになりました。このため急遽長老と話し合い（もしこのとき長老が数名でもわたしたちだけで礼拝を死守します！という主旨の申し出があれば、今度は濃厚接触者ではない長老たちによる礼拝も可能だったかも知れません。しかし、すでに知事の強い指示も出されており感染拡大の恐れが頂点に達している時期でしたので、残念ながら人が集まるリスクを心配する思いの方が上回ったということになるのだと思います）、やむなく15日と22日の礼拝を休会とすることとし、教会の人たちには牧師のメッセージと長老のメッセージ、そして3月29日から礼拝再開の予定である旨伝えました。

実はこの29日に一人の兄弟の洗礼式を行うことになっていて、本来であればわたしが司式をすべきですし、またそれを望んでもいたのですが、25日に退院した後、4週間は再感染予防や体調管理に万全を期すようにとの厚生労働省からの指示がありましたので果たせず、近隣の秋本英彦教師による洗礼試問の臨時小会、八田牧人教師による29日の礼拝、4月5日の礼拝ということになりました。両先生には感謝の思いで一杯です。

さて、以上のような経緯の中で深く考えさせられたことがあります。それは正に三瓶先生がコメントしておられる「新型コロナウイルス状況下で礼拝を守る指針」という課題です。

わたしが議長書簡を送ったのが2月27日だったわけですが、実はそれより二日前、2月25日付で、カトリック札幌司教区の教区長名による次のような指針が出されています。

「新型コロナウイルス感染に伴う公開ミサの中止について」

その中で

- ① 2月27日(木)から3月14日(土)まで、公開のミサ・集会祭儀や集まりを行わないこととします。特に3月1日と3月8日の主日のミサに関して、信徒として守るべき日曜日と守るべき祝日にミサ聖祭に預かる義務を免除します。ただし、各自において、その日の朗読箇所を読み、祈りをささげるようにしてください。
- ② 小規模な参加者で行うミサについても公開ミサであり突然の外部の方の参加の可能性のある場合は人数の如何に関わらず実施しないでください(専門家によると、北海道の地方に於ける感染は人数の多さによらないと考えられています)。やむを得ず実施する場合も、先に出した指針を徹底してください。また、司祭が感染すると最大の感染拡大者となるので司祭自身が感染者とにならないよう注意を払ってください。特に聖変化や聖体拝領の時の飛沫感染、接触感染予防には細心の注意をするようにしてください。
- ③ 結婚式や葬儀は、十分な感染対策を取ったうえで行ってください。
- ④ 部外者の参加がない小規模の修道院、外部の方との接触がない感想会等の修道院での聖務日課やミサ・集会祭儀等は、この限りでないこととします。

ミサの中止決定は、教区始まって以来のことであり、私達信仰者にとって苦渋の選択でもあります。それ故に事態の深刻さを認識し、この危機を乗り越えるための皆さんの理解と協力をお願いいたします。そして感染した方々の回復と感染の終息のためわたしたちの母である聖母マリアの取り次ぎのもと、父である神に祈りましょう。

以上がその指針です。同じ日に日本基督教団総会議長名でも指針が出されていますが、こちらは注意喚起にとどまっているように思います。「礼拝を取りやめることは出来ませんが、感染のリスクを減らすために、以下の事柄にご留意くださった上で、おささげくださるようお願いいたします」と記されています。

わたしが注目させられましたのは、カトリックの指針の方です。正直なところ、この指針が出されたことを知ったとき、教会がこのような通達を出してよいのだろうか」と思いました。とりわけ「特に3月1日と3月8日の主日のミサに関して、信徒として守るべき日曜日と守るべき祝日にミサ聖祭に預かる義務を免除します。」とのくだりです。

ところが琴似教会の場合、②で注意喚起がなされている、礼拝の司式・説教を担う者自身が感染者ということになりました(もちろんカトリックとわたしたちの職制の違いがあるわけですが)。わたし自身が2月後半頃から十分注意すべきだったとも思われています。さすがにカトリックの指針にも、もし司祭自身が感染者となった場合の対処の仕方についてまでは記されていません。

この思いがけない事態にどのように対処すべきか、大きな問いかけがわたし自身に迫ってきたのです。そして、わたしや長老たちが感染の真っ只中に立たせられる中で、当初「これは…どうなのか?」と思ったあのカトリックの指針の意味が少し見えてきた思いがいたしました。

すなわちこの指針は、もちろん軽々な判断から出されたものではなく、二千年に及ぶ教会の歴史やペストの蔓延等の経験を踏まえた通達であり指針なのだと思い始めた次第です。カトリック札幌司教区はこの度の感染拡大の現実が何を意味するものなのかをいち早く洞察し、また今後どのような事態が待ち受けているのかをも見据えた指針だったのだ、そしてわたしたちもよくよく心しなければならぬ指針だったのだと、強く思われています。

わたしたちにとって主日礼拝が教会の生命線であることは確かなことです。

主日の礼拝を死守した歴史や経験もあるでしょう。神がわたしたちの救いのために備えてくださった恵みの場であることは、どれほど強調しても足りないのだと思います。

しかしその上で、「教会にとって主日の礼拝は生命線である」ことの意義、したがって「礼拝を閉じてはならない」にもかかわらず、もし閉じざるを得ない事態に立ち至ったならばそれをどう受けとめたらよいのか…について、わたし自身、もう少し時間をかけて考えてみたいと強く願っています。礼拝とは、わたしたちが理解している以上に、恵みに満ちたものではないのか、もしも、礼拝が出来なくなるような事態となったとしても、その恵みは不変なのではないか…そのようにも思われているところです。

東京中会では主日礼拝を休会としたところが少なくありません。またドイツ在住の親しい友人からのメールには「ドイツでは先週末から非常事態に突入した感じです。教会も閉鎖、礼拝も取り止め、こんなことは初めてです。」と記されていました。

わたし自身、議長として新たな指針が求められているとも考えていますが、今少し考えを深めて、対応いたしたく思

います。繰り返し言われている「不要不急」の意味とのつながりについても考えを深めねばなりませんね。

まだまとまらない内容ではありますが、送らせていただきます。もしコメントがありましたら、聴かせていただけましたら幸いです。先生との対話を楽しみにいたしております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは先生、どうぞ十分気をつけてお過ごしくださいますように。

主にありて

久野真一郎

資料3 古賀清敬「新型コロナウイルス状況下の礼拝について」(所感) (2020.3.28)

三瓶長寿先生、みなさま。

新型コロナウイルス状況下の礼拝について (所感)

2020年3月28日 古賀清敬

現況下での貴重なご教示をありがとうございます。

礼拝についての基本的な考え方を確認し、歴史をふまえて大事な点をご指摘いただいたことを感謝します。また、井上豊先生、久野真一郎先生の体験やカトリックなど他の教団の動きなどから、考えさせられたことを僭越ながら述べてさせていただきます。

まず、ご承知のようにカトリックにおいては礼拝の中心は聖体拝領で、濃厚接触度が高いこと。また、聖職者の現存がミサには不可欠で、ゆえに不在の場合は「集会祭儀」と呼ばれています。これに比して、プロテスタントでは説教と聖礼典とが教会のしるしであり、礼拝の不可欠な要素で、とくに聖書に基づいた説教を重んじています。

わかりきっていることではありますが、カトリックとの対応の違いもこういう教会観・礼拝観から生じていることに当のプロテスタント教会員は意外と無自覚で気づいていないのではないかと感じています。

さて、わたしたち日本キリスト教会の場合には、憲法第一条4項で、礼拝を何のために行うのか、そこに規定されていることをこの状況下でいかに実現するか、という課題であるように思います。礼拝を行なうか否か選択の自由、参加の仕方をどうするかをあくまで小会や個人の信仰と良心に従って、というのは「神の主権を明らかにする」ためであり、神の福音を宣べ伝えるためにどういうことができるのか、……というように検討していけばよいのではないのでしょうか。筆不精の私がいいうのも何ですが、牧師や中会議長から教会員に向けて各自宅で読めるような説教と祈り、問安の文章が送られるというのも「キリストにある交わりを厚くし……」のよい機会となるのではと思います。(高齢者はIT機材やSNSだけではフォローできませんから)

その際に、「安息日は人のために定められた。……」(マルコ27, 28、他)というイエスの言葉に留意する必要があると思います。神はこの事態で何をわたしたちに問いかけておられるのかを慎重かつ真剣に問い、五輪や政治日程や一部の利権獲得などに振り回されてしまうあり方に対して警告を発する課題も「神の主権を明らかにする」課題であると考えています。最も弱い状況にある人々を最優先に考えての対応も「人の子が安息日の主である」との言明に沿うことかと思えます。

今回の事態がグローバリズムによってもたらされたことはたまに指摘されていますが、その通りとしても、対立、格差と差別の拡大増長という、その内容的問題性に注目する必要があります。かつてのペストも十字軍と都市の発展の後でしたし、「スペイン風邪」は第一次大戦直後で人の往来と疲弊が高まっていた時でした。それらの中でユダヤ人への迫害が行われてきて、ルターなど宗教改革者らも例外ではなく偏見を克服できないままでした。それがヒトラー政権にも悪用された歴史を想起しなければなりません。このように疫病が人間の罪深いあり方と深く結びついている実態を、聖書の証言に導かれて語っていく課題があるのではないかと考えています。

礼拝の形式や持ち方をどう感染拡散から防御するか、各教会の事情に応じて工夫するのは当然ですが、この状況の中で「神の主権を明らかにするために」教会が何に留意し、何を語るのかが問われていると思いましたので、ご参考になれば幸いです。

感染した方々の回復と明日の礼拝が守られますようにと祈りつつ。

在 主。

資料4 澤正幸「愛する兄弟姉妹への手紙」(澤正幸)

愛する兄弟姉妹への手紙

わたしたちの父である神と主イエス・キリストから恵みと平和が、あなたがたにありますように。今、わたしたちが、いいえ、わたしたちだけでなく全世界の兄弟姉妹が体と魂に受けている苦しみを覚え、主なる神さまがわたしたちを憐れみ、慰めを与え、わたしたちに望みを抱いて歩むことをお許しくださるように祈ります。

日本キリスト教会が発行している「福音時報」2020年5月号の末尾に「教会の祈り」と題する、編集委員の一人、香里園教会の南望牧師による祈りの言葉が記されています。少し長いですが、全文を引用します。

「新型コロナウイルスによる影響は、人の集中している都市部で酷くなっており、日本政府によって4月7日(火)緊急事態宣言が出されました。皆様がこの文章をお読みになる時に、どのような状況になっているのか分かりませんが、このウイルスは、教会が大切にしてきた礼拝と交わりに大きな影響を与えています。

3月の段階では、それぞれの教会・伝道所に置いて対策を練り、感染を予防しながら礼拝や集会を行う群れがおおくみられました。その段階で問われていたのは、礼拝共同体として礼拝をどのように維持するのかという問題でした。しかし、感染者が増えてきた4月の初めからは、「同じ時間、同じ場所にいる」という共在性を前提とした礼拝や祈祷会・集会が続けられなくなっている群れが増えています。そのような中、インターネットを用いて礼拝を配信してゆこうとする群れもありますが、教会にはインターネットを使っていない人が多くいることを考えると、手紙や電話で連絡を取り合うなどの牧会的な配慮が今まで以上に必要になっているように感じています。

今私たちは、神さまから問いを与えられています。その問いの中心にあるのは「礼拝出来ない状況が続く中で、どのようにして礼拝共同体を維持していくのか」という問いであり、「どのようにすれば、群れにある一人ひとりの信仰が守られるのか」という問いだと思います。その問いに向き合いつつ、一つひとつの群れが知恵と忍耐力を祈り求め、神さまが必ずやこの困難な状況を乗り越えさせてくださると信じ、前に進むことこそ、大切だと感じています。日本キリスト教会に連なる群れすべてが、神様に導かれ、守られ、支えられていきますように。アーメン。」

新型コロナウイルスがもたらした混乱の中で、教会が神さまから与えられた問いを、正面から受け止めて、教会がその問いに向き合いつつ前進して行きたい、神さま、どうぞ教会を導いてくださいという祈りです。ところで、このような問いを問われているのは、全世界のすべての教会であって、日本の教会だけではありません。

九州中会の宣教教師、釜山で宣教活動を続けておられる金山徳教師から送られてきた報告は次のように韓国の教会の状況を伝えています。これも長いのですが、全文引用させていただきます。

「1月19日、韓国においてコロナウイルスの感染者が初めて発生して以来、4ヶ月ほどが経とうとしています。陽性確定の数が一番多く発生した2月29日を頂点にして次第に減少して、最近では10名未満となりました。それも外国からの入国者である場合が多いので、実際、韓国国内における発生率は非常に低い状態になりました。

韓国政府は、社会的距離の確保を自発的に守るように強く勧告しました。それによって教会を含む諸団体や会社などは集まりや出勤などを控えるようになり、3月に入ってはやはり各宗教団体などは定例の集会を中止することになりました。教会も、主日礼拝をインターネットによる礼拝や家庭礼拝に代えざるを得ませんでした。もちろん、そのような中でも教会における現場礼拝を強行する教会もありました。

しかし、過ぎる復活節(4/19)を期して、多くの教会が現場礼拝を再開しました。多分、連休明けの5月中旬からは、初・中・高の学校も開校するのではないかと期待しています。

依然として、コロナウイルス発生の危険性がありますので、注意深く正常への回復を希望しております。釜山告白教会の主日礼拝は、3月1日から全面的に中止となりましたが、4月19日の復活節礼拝から再開しました。子供連れの家族や老いた方々の出席はいまだに難しい状況で、もう少し時間が欲しいところでもあります。

このコロナウイルス事態の発生によって、ホドス神学院も全ての集まりが中止となりました。今学期の働きはこのままでいこうと思います。何よりも、2月の末に計画しておりました第1回韓日神学シンポジウムが無期延期となり、

非常に残念に思っています。今のところ、再開の日程を確定することは難しい状態ではありますが、主の御心にかかった時に、必ず開こうと祈り求めています。

ところで、徐々に回復されつつあることは何よりの感謝ではありますが、同時にコロナ 19 がもたらした様々な問題をも今後覚えて、祈らなければならないところであります。

今回の事態は政治や社会的な問題ではなく、医学的な問題によるものであり、それによって現場礼拝（聖餐）が中止されたと思います。結局のところ、所謂インターネットを通しての「映像礼拝」というものに対して、深い神学的吟味をすることもなく、政治や社会の雰囲気押し付けられた形で、やらざるを得なかったという側面があることは否定できないと思います。さらに、政府、自治体、そしてマスコミなどによる現場礼拝に対する間接的な圧力がなかったともいえません。どんなことがあっても礼拝を守ってきたプロテスタント教会にとって、このような医学的な事態による教会礼拝の変質、極端な言い方をすると、教会の枝々をバラバラにしていくような事態をどのように考えていくべきなのかも今度の課題ではないかと思えます。

さらに教会のディアコニアとして、コロナウイルス事態による社会的な問題を教会はどのように受け止めるべきかということも、今後の教会のディアコニアの課題として覚えなければならない事柄であると思えます。例えば、失業者、賃貸料を払えない教会、家賃を払えない店舗なども続出しています。このような状況の中で、教会の礼拝の再開は嬉しいことでありつつ、また助け合っていかなければならないディアコニア的課題も残っていることを覚えます。したがって、ホドス神学院と釜山告白教会は、Post-Covid19 にどう対応していくべきかを共に祈り、また助け合うことへの道に仕えていこうとしています。

主の平安を祈ります。」

韓国は、日本より一足先に新型コロナウイルスの感染拡大が終息に向かい、正常な社会活動の回復の兆しが見え始める中で、今回、教会が問われた問いは残ることが指摘されています。また、教会の礼拝が再開されても、助けを必要とする多くの人々への奉仕の課題が残ることを金山徳教師は指摘されています。

ここで、いま教会に何が問われているのかを、もう一度振り返ってみたいと思います。

南望牧師はこう書いています。

「今私たちは、神さまから問いを与えられています。その問いの中心にあるのは『礼拝出来ない状況が続く中で、どのようにして礼拝共同体を維持していくのか』という問いであり、『どのようにすれば、群れにある一人ひとりの信仰が守られるのか』という問いだと思います。」

教会のギリシャ語エクレシアは、ヘブル語のカーハールと関係があり、集会を意味します。集まるという教会の本質に関わる部分で、教会はいま重大な挑戦を受けています。また、教会はキリストのからだと言われます。キリストをかしらとする共同体です。キリストとわたしたちのつながりは、ブドウの木とブドウの枝のように切り離せない生命的なつながりです。また、キリストとのつながりは、同じ木につながる枝々相互のつながりを伴います。この生命的関係が維持されるのか、それとも失われるのかという危機にわたしたちの教会はいま直面させられており、どのようにしたら、教会とその枝々の信仰を守れるのかというのが、わたしたちが受けている問いです。

金山徳教師の指摘された問題は次のことでした。

「今回の事態は政治や社会的な問題ではなく、医学的な問題によるものであり、それによって現場礼拝（聖餐）が中止されたと思います。所謂インターネットを通しての「映像礼拝」というものに対して、深い神学的吟味をすることもなく、政治や社会の雰囲気押し付けられた形で、やらざるを得なかったという側面があることは否定できないと思います。さらに、政府、自治体、そしてマスコミなどによる現場礼拝に対する間接的な圧力がなかったともいえません。どんなことがあっても礼拝を守ってきたプロテスタント教会にとって、このような医学的な事態による教会礼拝の変質、極端な言い方をすると、教会の枝々をバラバラにしていくような事態をどのように考えていくべきなのかも今度の課題ではないかと思えます。」

教会は「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」との信仰告白に立って、政治的、社会的勢力の圧迫に屈

しないで、神への服従を貫こうとしてきました。しかし、今回の相手は政治的権力ではありません。教会が直面させられたのは医学的な問題でした。でも、その時でも、医学的問題を通して問われたのは神への信仰であり、教会が礼拝を中止するという判断は、それが教会のかしらイエス・キリストの御心だと信じてのことであるはずで、やむなく、「映像礼拝」という道を選択するにせよ、聖礼典の執行を伴わない「映像礼拝」が果たして主の求められる礼拝にふさわしいかどうかの吟味、判断は欠くことができませんし、そのようなインターネットへのアクセスを持ち得ない、世界の貧しい国々の圧倒的多数の兄弟姉妹を思い合せながら、教会が慎重に自らに問わなければならないことです。

これらの問いについて、さらに掘り下げてゆく前に、わたしたちを苦境に追い込んでいる相手の正体、新型コロナウイルスによる脅威が世界に対して、特に教会に与えている影響について思いめぐらしてみたいと思います。

今度の事態を迎えて、早くから多くの人々が読み直したのが、カミュの「ペスト」だと言われています。戦後まもなくアルジェリアで起きたペストの流行が小説の舞台ですが、作者のカミュがこの小説を書いた動機は、ナチス・ドイツの時代に経験した社会的不条理に対する抵抗を取りあげようとしたのであると解説されています。

わたしは第二次世界大戦中、ナチス占領下にあったフランスのレジスタンスの映画をみて大きな衝撃を受けました。レジスタンスの活動家たちが、ナチスに抵抗する同志でありながら、その仲間同士、ときに非情の極みとしかいいようのない粛清をしたということです。

活動家たちはナチスに捕まると酷い拷問に耐えかねて、仲間の名前を密告してしまいかねないという理由から、仲間だった活動家があるような可能性を持つようになったら、その活動家がナチスに捕まる前に、自分たちの手で処刑したのです。実に戦慄を覚えさせられる場面でした。そして、真のレジスタンス活動家というのは、最後の最後まで、仲間の名前はもちろん、本名すら明かさずに死んでゆく者たちであり、そのようにしてフランスの解放を迎える前に、何人もレジスタンス活動家が命を落としたという映画でした。この映画を見終えたとき、なんとも言い表せないような暗い気持ちになりました。それはレジスタンスの闘士たちにそこまでの犠牲と苦痛を与えたナチスの不条理に対するやりきれない怒りと結びついていました。

フランスの自由と解放を目指して抵抗するレジスタンス活動家同志の絆、連帯、結びつきをすらバラバラにするナチスの不条理な支配。カミュは、ペストの流行する社会におかれた人々が、お互いがお互いにとって危険な存在である、そのような脅威のもとで、人間同士の関係がバラバラにされる姿を、ナチスのもとで経験させられた不条理と重ね合わせたのでしょう。しかし、その中でもなお人間性を失うことなく、守り抜くための抵抗はどのようにしたら成し遂げられるかをカミュは追求しようとするのだと思います。

この度の新型コロナウイルスは医学的な問題ではありましたが、信仰者にとっては霊的な問題であったと思います。すなわち、自分が症状さえない、無自覚の状態でありつつ、他者を危険にさらしているのではないかと、他者の命を脅かす存在になりうるという良心の苦しみです。この不安と恐れは、自分自身が感染して命を落とすかもしれないという不安と恐れよりもずっと深刻なものでした。

自分が隣人を愛するどころか、隣人の命を危険にさらしかねないという良心の苦しみ、その恐れは、わたしたちの最も中心的な信仰、すなわちイエス・キリストを信じる信仰によって罪を赦され義と認められるということと、どういう関係になるのでしょうか。新型コロナウイルスの問題が霊的な問題だというのは、そういう意味です。

また、隣人との間に距離を置くべきである、出かけない、人と会わない、共に食事をしない、それが隣人の命を守ること、隣人を愛することだと勧められるとき、本当にそれが隣人を愛することだと心から納得できるのでしょうか。こどもや、弱者や、孤独に耐えられない人に対しても距離を置くことが、愛することになるとは思えません。主イエスがお命じになった、わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさいという、主の掟を守るといことは、新型コロナウイルスの脅威に囲まれているわたしたちにとって、どう生きることなのでしょうか。これは、キリスト者の倫理の問題です。

新型コロナウイルスの蔓延によって、教会が問いかけている問題をどう神学的に受け止めるべきかについて、世界の教会で様々な発言がなされていると思いますが、日本においては、寡聞にして、日本キリスト改革派教会の神戸神学校長、吉田隆氏の発言以外に、目ぼしいものは見当たらないように思います。新型コロナウイルスが問題になったごく初期の3月17日付けで発表された「ウイルス禍についての神学的考察」という文書において、吉田氏はまず聖書から「疫病」をどう理解すべきかを説き、ついで、「疫病」を経験した教会史上の人物として、古代教会のキプリアヌスと、宗教改革者ルターを紹介しています。

さらにハイデルベルク信仰問答から教理的課題を示し、最後に実践上の課題に触れています。

わたしはこの文書について、内容もさることながら、聖書と世々の教会の教えから、教会が直面している問題について、教会が聞くべきこと、また教えるべきことを示していることに深い敬意を表さずにおれません。新型コロナウイルスによってもたらされた危機に直面して、医療関係者は休みなく働き、ワクチンの開発を目指す人々、なんとかして医療崩壊を防ごうとする人々は日夜懸命に働いています。また多くの商店が店を閉じて、人々の命をつなぐ食料を提供するスーパーは営業を続けています。この危機に立ち向かうのに必要な対策を講じる責任を持つ、政府や地方公共団体の機関、部署は休みませんし、休めないでしょう。日々集まって会議をし、活動を続けなければならないのです。それに対して、教会は活動を休止するのでしょうか。教会はこの危機の中で働くべき使命を持っていない、社会的に不要不急な存在として、休んでいれば良い存在であることを自他ともに認めて良いのでしょうか。

「御言葉を宣べ伝えなさい。折りが良くても悪くても励みなさい。」(2テモテ4:2)という命令の、悪い折りとは、まさに今のようなきを指しているのではないのでしょうか。イタリアで新型コロナウイルスに感染したために隔離された病棟で、家族との面会を許されない中で死んでゆく病人たちに、最後聖餐を授け、臨終の際の祈りを唱えた医師たちは、教会の果たすべき使命と責任が決して消滅しないことを示しています。

「神の言葉はつながれていません。」(2テモテ2:9) 教会が活動の範囲を制限され、牧師たちの説教する機会が奪われたとしても、「神の言葉」は制約を受けないのです。

最初の問いに戻しましょう。「礼拝出来ない状況が続く中で、どのようにして礼拝共同体を維持していくのか」、礼拝は神の言葉が語られ、神の言葉が聞かれるという出来事を中心としています。礼拝に集まり、神によって立てられた牧師の口を通して神の言葉である聖書の解き明かしを聞くことができない今の状況の中で、それでも「神の言葉はつながれていない」とはどういうことでしょうか。普段の礼拝の場ではないところ、病室、家庭、職場、学校、様々な場で、牧師ではない信徒たちが、医師として、看護師として、父、母、兄弟姉妹として、御言葉に聞き、聞いた御言葉を語ることが聖霊によって可能とされるでしょう。そのとき、確かに、「神の言葉」はつながれていない、様々な制約を超えて語られ、聞かれることでしょう。

そこで語られる「神の言葉」の中心メッセージは何でしょうか。マルチン・ルターの宗教改革は、当時流行したペストと関わりがあるとの指摘があります。人々はペストによってもたらされた恐れと不安に対して、中世以来のローマ・カトリック教会が差し出していた救済によっては、魂の真の慰めを見いだすことができないでいたと言います。ルターが神の言葉によって説教した、イエス・キリストを信じる信仰による義によって、人々はそれまで抱いていた良心のおそれと不安から解放されて、救いの確信を与えられ、救われたのでした。

わたしたちは今、自分自身を責め、また人を裁き、互いに裁きあっていないのでしょうか。家庭においては夫婦が、また親子がいがみ合い、社会にあっては非難や中傷の言葉が行き交い、政治的指導者もまた医療の専門家たちまでもが、繰り返し批判の対象になっています。国々の指導者は、誰が新型コロナウイルスの疫病発生に責任があるかを巡って争っています。

人の子イエス・キリストは地上で罪を赦す権威を委ねられた者として、神から遣わされてこられました。このお方は自らわたしたちの病と患いを身に負われ、十字架について、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪の贖いを成し遂げてくださいました。このお方は、わたしたちに、また世界に回復をもたらしてくださいます。

学校に行って学びたい子どもたち、まっとうな商売を続けたいと願うお店の人たち、これまで普通に営んできた生活を妨げている疫病の力が取り去られることを願う、多くの人々の願いと祈りを、その人々が願う以上に、主イエスが、また父なる神ご自身が願われるのです。

イエス・キリストが全世界のために執り成して祈られる祈りが、今日も、またこれからも永遠に祈り続けられる以上、わたしたちは、この大祭司であるお方のもとで、恵みの福音を語り続け、多くの人のために執り成して祈り続けるのです